



第 17 号 令和元年 10 月
発行 番町小学校同窓会
〒102-0085 千代田区六番町 8
東京都千代田区立番町小学校内
TEL 080-3012-1001 FAX (03)3263-3731
郵便振替口座 00160-7-352085
編集 番町小学校同窓会事務局
印刷 株式会社 精興社

ご挨拶

同窓会会長 豊島 快兒

番町小学校同窓生の皆様におかれましては、平素より母校への多大なるご協力、ご支援を賜り心から敬意を表します。

近年の世界的異常気象で、本年は長梅雨で冷夏という予報が、7月末の梅雨明けと同時に猛暑に見舞われ、さらに度重なる台風の上陸で日本各地に甚大な災害をもたらしています。被害に遭われました方々、そして地域へお見舞いを申し上げますとともに、一刻も早い復旧をお祈りいたします。

さて、母校 番町小学校は明治3年6月13日、東京府下仮小学校の一つとして市ヶ谷洞雲寺境内に創設され、明治4年12月4日、文部省直轄の小学校として「小学第二校」と改称され、この日を創立の日として開校式が挙行されました。その後、明治6年の学制改革に際し、「官立学校一番小学番町学校」と名付けられ、これが番町小学校の名前の由来となりました。以来、番町尋常高等小学校、東京市立番町国民学校、千代田区立番町小学校と名称も変わり、廃校の危機や統廃合問題などの変遷を経て、我が「番町小学校」は、永い歴史と伝統を育んでまいりました。

こうした伝統と傑出した学業の成果は、つねに公立小学校の範となり、戦前はもちろん、戦後にあっても、昭和26年の創立80周年式典より創立120周年までの10年の節目ごとに5回にわたり、天皇皇后両陛下ご臨幸、皇太子殿下、同妃殿下ご台臨を仰いでまいりました。

しかし、平成13年の創立130周年の際には、千代田区全体の公立小学校の統廃合が行われて間もなくだったため、統廃合の対象となった学校に配慮して式典を見送った経緯がありましたが、平成23年に迎えた創立140周年の式典に際しましては、こうした節目ごとの5回に及ぶ皇室ご訪問という貴重な事績を継承し、皇太子殿下のご台臨を仰ぐことができました。

そして令和3年に迎える大きな節目である創立150周年の式典に際しましては、ぜひ皇室をお迎えしたいという思いは、同窓生はじめ地域、学校関係者など多くの方々の熱い思いです。

しかし、この創立150周年記念行事は皇室をお迎えすることが目的ではなく、この栄えある番町小学校の伝統と歴史を振り返ることにより、今後の益々の発展と学業の向上をめざす糧となり、ここに学ぶ児童はもちろん教職員の方々にとっても大きな励みとなるものであると信じています。

この度、令和元年9月8日に創立150周年記念事業協賛会を発足いたしました。

今後、計画しています記念式典および記念行事の遂行は、同窓生の方々、地域の方々、在校生及び保護者の方々、そして学校関係者の方々の絶大なるご協力が不可欠です。

ぜひとも、この協賛会にご理解を賜り、創立150周年記念行事を成功に導けますよう、皆様のご協力を切にお願い申し上げます。



番町小学校とその周辺 ～明治女学校を知っていますか～

新井 巖（元同窓会会長 昭和30年度・六番町町会長）

今まで、番町小学校と明治女学校とを結びつけて紹介されたことはないが、同時期にあって校舎も1ブロック先の直線距離にしたら100m程度しか離れていない。番町小学校が、現在の場所（当時は下六番町）に来たのが明治5年、明治女学校が六番町の地に移転してきたのは、明治25年（1892）である（六番町1-3に「まちの記憶」プレートあり）。

その後、女学校の校舎が焼失して、雑司ヶ谷に移転するまでのわずか4年ほどしか重なっていないが、有形無形の影響があったのではないかとくに、この六番町の頃の明治女学校が最も隆盛を極めた時期であった。

当時の女学校の教師としては、校長であった巖本善治（「海舟座談」などを編纂）、その妻の若松賤子（「小公子」の翻訳で有名）を筆頭に、巖本が発行をしていた雑誌「女学雑誌」のメンバーであった星野天知（「文学界」主筆）、北村透谷（評論家・作家）、島崎藤村（作家・詩人）、戸川秋骨（英文学の翻訳者）、馬場孤蝶（英文学者）、青柳有美（宝塚でも教鞭）、桜井鷗村（津田梅子と「女子英学塾」を創立）などがいた。

いずれもまだ二十代の若い教師たちで、情熱を込めて教壇に立った。教える方も教わる方もほぼ同年代であることも多かったから、師弟の間で恋愛感情も生まれた。島崎藤村が教え子の佐藤輔子に失恋して一時期教壇を去り、その後復帰するものの熱のない授業をして「燃えかすだから」と生徒の相馬黒光（新宿中村屋の創立者）に評されたのは有名な話だ。もちろん、そうした若い教師たちだけでなく、女学校の発起人の一人であった島田三郎（ジャーナリスト・政治家）、幕末から維新にかけて屈指の外交官であった田辺太一（「幕末外交談」の著もある）、大和田建樹（詩人・歌人）、さらに帰国したばかりの津田梅子（「女子英学塾」創立者）、日本の女医の先駆者である荻野吟子などの当時の知識人も教壇に立っていた。樋口一葉も「文学界」編集部や若松賤子のもとをしばしば訪れており、同校との交流もあったと思われる。

また生徒には、前述の相馬黒光、大塚楠緒子（作家「お百度詣」）、田辺花圃（近代女流作家の第1号、「藪の鶯」）、羽仁もと子（日本初の女性記者、自由学園の創立者）、清水紫琴（「女学雑誌」の記者として活躍）、野上弥生子（作家）など、のちに女性の地位向上に貢献のあった先進的な女性たちがいた。

当時、隣地に住んでいた有島武郎も明治25年当時はまだ14歳。その頃の番町小の卒業生には、芳賀矢一（国文学者）、大町桂月（随筆家）といった人たちがいたが、残念ながら明治女学校との交流の記録は見当たらない。しかし同時代で進取の気象にあふれた両校が、無意識のうちにでも啓発があったと想像するのは楽しい話ではないだろうか。

（写真は全て麴町界隈がまち人物館HPより）



巖本善治



若松賤子



相馬黒光



大塚楠緒子

～ 同期会・クラス会報告 ～

3組クラス会の開催

右田 正隆（昭和31年度）

2018年10月6日（土）、永田町の星稜会館内レストラン、シーボニアで昭和31年度卒（1956）6年3組のクラス会を開催し、総勢16名のクラスメイトが参加しました。卒業以来、ほぼ5年毎に番町小学校近辺の会場でクラス会を開催していましたが、古稀を迎えた2014年のクラス会で「元気なうちにもっと会おうよ」との声が出て、2016年から毎年、10月第一土曜日、シーボニアに集まることに決めました。

2017年のクラス会で卒業記念文集『ゆうかり』の復刻版を出席者に配布したほか、施設に入居中の恩師、竹内千重子先生や亡くなられた旧友のご家族にもお贈りしたので、2018年のクラス会では竹内先生や旧友のご家族に最近のご様子や文集の読後感を伺った報告が、女性幹事からありました。お歳のためご自身ではお読みになれない竹内先生はご家族に文集を日々、少しずつ読んで頂くと、とても懐かしがっておられたと、また亡き旧友のご家族は文集を仏壇にお供えしたとのことでした。

クラス会当日に参加者全員が、竹内先生への感謝の言葉を寄せ書きした色紙と番町小学校校歌『われらがかざせる』『記念日の歌』を録音したCDのほか、奇しくもクラス会開催の10月に満101歳の誕生日を迎えられる竹内先生に花束を贈ることを決めました。

クラス会当日に参加者全員が、竹内先生への感謝の言葉を寄せ書きした色紙と番町小学校校歌『われらがかざせる』『記念日の歌』を録音したCDのほか、奇しくもクラス会開催の10月に満101歳の誕生日を迎えられる竹内先生に花束を贈ることを決めました。

我々の年代になると、自身の体調や家族の問題もあり、毎年開催ルールがいつまで続けられるか分かりませんが、参加したクラスメイトは今まで通り自分らしい生き方を続け、「元気でまた会おう」と2019年の再会を誓い合いました。



竹馬会、約40年ぶりの参加者も

岡野 洋三（昭和41年度）

昭和41年度（1966）6年2組、通称「竹馬会」は2018年10月17日（水）夜、麴町のイタリア料理店でクラス会を開きました。米国在住のクラスメイトが里帰りで一時的に帰国するのに合わせて急きよ呼び掛け、平日開催でしたが、22人が参加しました。一時帰国の日程が合うのは久しぶりで、「クラス会での再会は初めて」という出席者もありました。また学生時代に引っ越してから足を延ばしにくくなり「約40年ぶり」という旧友が参加し、「小学校卒業以来の番町界限」を歩いて会場に到着。参加者こもごも当時の遊び友達を尋ね

合ったり、思い出話に花を咲かせたりしていました。竹馬会は1、2年ごとに集まっていますが、陰で支えてくれているクラスメイトの労苦やエネルギーが継続のカギとなっているのは間違いありません。仕事や親の介護、引っ越しなど、さまざまな事情でなかなか出席できない人もありますが、前期高齢者への仲間入りを来年に控え（！）、身体が空いた時に参加できる機会があるのはありがたいことだと思います。



成人を迎えて同窓会

黒沼 彩香（平成 22 年度）

私達は、平成 30 年度（2018）に成人を迎えました。そこで成人のお祝いを兼ねて、2019 年 2 月 16 日（土）に同窓会を開きました。皆、事情があったりで 30 人程での開催となりましたが、久しぶりの再会が多く、会ってから笑いが絶えず、話をしたり皆、楽しそうでした。

皆が楽しめるか心配だったビンゴ大会では、同窓会で行なっている景品のくじ引き形式を取り入れ、良いものを当てたり変なものを当ててしまったりで、楽しめていたのではないかと思います。

同窓会で伝えきれなかった担任の先生についてですが、6 年 1 組の担任だった井田先生は今、麴町小学校の副校長先生です。6 年 2 組の担任だった納先生は中国にある深圳日本人学校に勤務、6 年 3 組の担任だった川田先生は世田谷区の小学校に勤務しているそうです。

小学校の時のように、皆元気でよかったです。急だったりテスト期間だったりで来られなかった人が多かったのですが、また機会があれば同窓会を開きたいと考えているので、その時に皆で集まると嬉しいです。



昭和 29 年度（1954）1 組クラス会

江口 清象（昭和 29 年度）



私たちのクラスは、最近では 3 年に 1 度くらいの周期でクラス会を開催している。2019 年 5 月 19 日（日）、正午から午後 2 時まで四ツ谷のプラザエフでクラス会を開催したところ、16 名の方が参加した。久しぶりに会ったので、皆さまから近況を報告してもらった。

クラス会が終わって、参加者のうち 9 名で、母校の最近の様子を見に行くことにした。日曜でも運よく記念室を見学させてもらい、たまたま同窓会事務局がおられて案内していただいた。

記念室には、当時の校長先生、担任の先生の写真が展示されていた。また、私たちが 3 年の時に創立 80 周年記念となり、昭和天皇が記念式典に参列され、その写真も飾られていた。

この 9 名は、今は郊外にバラバラに住んでいるが、当時は学校近辺に住んでいてお互いの家に遊びに行った。当時の新宿通りは真ん中に都電が走り、その外に一車線の車道と歩道がある狭い道だった。その周りには木造一軒屋の店舗が並んでいた。小学校の周りは、空襲で焼け野原となったが、その後木造の一軒屋が建った。私たちは、そんな一軒家から通っていた。学校周辺は当時と様変わりなので、その頃が懐かしく思い出された。

学年で集まると…

野崎 敏夫（昭和 31 年度）

2019 年 5 月 23 日（木）、飯田橋にあるホテルメトロポリタンエンドモンドの“ベルテンポ”で、昭和 31 年度卒の学年会を開きました。皆、料理と好きな飲み物を手に、積もる話に花を咲かせています。今回は人数がやや少なく、25 人前後の出席でしたが、遅れてくる者あり早退する者あり。でも、このくらいになったら、それもありかなと思うのです。

初夏の昼下がりの一時、幼なじみとの時間はゆったりと過ぎていきました。



題字：故 内田禮江さん（昭和 19 年度卒）

復刻校章デザイン：鈴木健之さん（昭和 45 年度卒）